ウォルター・ペイターと透明な自己

――〈想像の肖像〉における理想的人格――

虹林　桜

はじめに

ウォルター・ペイター唯一の長編小説『享楽主義者マリウス』(1885)（*Marius the Epicurean: His Sensations and Ideas*）は、ペイター独自のフィクションジャンルである〈想像の肖像〉（“imaginary portrait”）に属すると考えるのが定説であり、その源流はエッセイ「透明的性格」(1864)（“Diaphaneitè”）に遡る。本発表では、「透明的性格」で示される理想的人格の具体的実現例を『享楽主義者マリウス』の主人公マリウスの教養の獲得を通して考察する。その際、主に小説を通じて現れる白色のイメジャリーが鍵となることを示しつつ、「透明的性格」に通じる教養の特質を明らかにする。

１．「透明的性格」“Diaphaneitè”における「教養」の実現可能性

「透明的性格」はペイターにとっての理想的人格を記した最初期のエッセイであり、研究者間で解明が難しいことで知られる。透明的性格は、自己に活気を与えるあらゆる刺激をそのまま受け入れると同時に、何物にも影響されない特質を持っている。透明的性格のこのような特質は、何物にも同化せず確定されることのない、幼い子供の純粋性に近いものであり、「タブラ・ラーサ」という言葉を使って説明できる。しかし、透明的性格は人生におけるあらゆる時期に繰り返し現れ出るとするペイターの主張から(*Works* 8: 254)、彼にとっての「タブラ・ラーサ」とは、プラトンのいう何度でも経験による書き込みが可能な蝋でできた板、もしくは羊皮紙に近いものであるといえる。そのため、透明的性格はその瞬間ごとの種々の経験を印象として受け入れつつも、それらを常に刷新することが可能であると考察できる。ペイターは、このような理想的人格の完成において要となるものを知性 “intellect”に求め、透明的性格における知性とは教養 “culture”であると述べる(*Works* 8: 250)。教養について、ペイターは『ルネサンス』(1873)（*The Renaissance*）で “culture”の代わりに “education”という言葉を使い、感受性がより深く、より多様になる程に教養 “education”が完璧になると説明する(*Works* 1: ix)。ペイターの教養の独自性は、美的経験による感受性の涵養とそれに伴う内省的な自己修練の過程から成り立ち、最終的に個性を保持するということにあり、これは「透明的性格」を敷衍するものと考えられる。

２．生まれ故郷でのマリウス

『享楽主義者マリウス』は紀元 2 世紀ごろのイタリアを舞台に、主人公マリウスが様々な思想に触れながら、異教からキリスト教へと興味を移す過程を描いている。しかし、マリウスの精神面での変化を辿っていくと、本作をただの改宗の物語として読むことはできないというのがこれまでの研究の見解である。本発表もこれに従った上で、マリウスの人格形成に焦点をあて、故郷の風景を軸に彼の幼少期を彩る白色のイメージに着目した。マリウスの魂の清廉を中心とした人生は、「白夜」を意味する生家の名前に始まり、白い鳥 “white bird”の暗喩によって、彼の母親の言葉にも予兆される(*Works* 2: 26)。魂の清廉を念頭に、マリウスは感覚を頼りにして観照 “contemplation” (*Works* 2: 28)を実践することで教養を深めていく。

３．教養の獲得①親友フラヴィアンの死

マリウスの教養の獲得は、段階的に示される。最初の段階は、初めてできた親友フラヴィアンの死という悲劇の体験に確認できる。フラヴィアンを看取った経験は、教養の涵養においてマリウスを感覚の媒介である肉体の重要性に目覚めさせる。それは比喩的に印象を受容する「心の書字板」（全集 3: 95）“the tablet of the mind” (*Works* 2: 145)を磨いてゆくことに他ならない。ここで、幼少期に白い鳥に喩えられたマリウスの魂は、フラヴィアンの死を通じて「心の書字板」にとってかわる。白色のイメージは継続し、透明的性格の形成の実践を比喩的に表しているといえるだろう。マリウスにとっては、あらゆるものを直観的に受容するための能力を発達させることが教養の獲得であり、あらゆる器官を洗練してその能力を発達させ、体全体を「一つの複雑な媒介物」（全集 3: 97）“one complex medium of reception” (*Works* 2: 147)として完成させることが重要なのである。

４．教養の獲得②皇帝アウレリウスへの反発

マリウスの教養の獲得における次の段階は、哲人皇帝マルクス・アウレリウスとの関りにおいて確認できる。感覚を重視するマリウスが肉体を尊ぶのに対し、アウレリウスは肉体を軽蔑する人物であることが判明する。マ

リウスはアウレリウスの姿勢の対極にあるものとして友人コルネリウスの肉体を称賛する。マリウスは「生まれながらの本能的な信仰」（全集 3: 8）“a native instinct of devotion” (*Works* 2: 9) を持っており、それは幼少期の自然に囲まれた生活において肉体に対して感じる敬虔な喜びに裏打ちされていた(*Works* 3: 9–10)。マリウスは、コルネリウスの肉体が太陽の光を彷彿とさせる「聖なる礼拝式の対象」としての「純金」“finest gold”として自らに喜びを与えることを認める（全集 3: 192–193） (*Works* 3: 55–56)。こうして、マリウスの肉体に関する審美眼は、アウレリウスの肉体への軽蔑への反動を契機に完成し、彼の教養を形作ることとなる。

５．教養の獲得③啓示的な経験

マリウスの教養の獲得における次の段階は、啓示的体験に示される。アウレリウスの宮廷を離れると決意した後、マリウスは世界の生命を司る大きな存在を悟り、自身の肉体の能力が外的エネルギーの大きな流れの中で完成していると感じる。この絶えず移り変わるエネルギーへの受動性、そしてそれによる能力の完成は、「透明的性格」の完成を説明するものであるといえる。自身の肉体の能力の完成を「風に吹かれる木の葉」（全集 3: 202）“a leaf on the wind” (*Works* 3: 70)という自然現象に例えたマリウスは、啓示の瞬間において自身の「透明的性格」の本質に気が付くと同時に、自身の教養を完成させていると解釈できる。

６．死の床でのマリウス

作品後半で病に倒れたマリウスは、観照に重きを置いてきた自身の人生について、「心の曇りなき受容力」（全集 3: 301）“unclouded receptivity of soul” (*Works* 3: 220)が経験を経て頂点に達したと考える。マリウスは教養を通じて心の「受容の能力」“receptive powers”を高め、絶えず移り変わる経験に対してより敏感に対峙しようとすることで、自身の「白い鳥」の魂、即ち「心の書字板」を「白く滑らかに」“white and smooth”に保ちつづけた（全集 3: 301）(*Works* 3: 219, 220)。彼の「白い鳥」としての魂は、ただ清純に保たれるということ以上に、教養という自己修練の過程を経て、より洗練された白色となってマリウスの最期を象る。マリウスの教養による自己修練の過程は、フラヴィアンやアウレリウス、コルネリウスとの交流を通じて、その心が洗練された書字板になること、つまり透明的性格の洗練により完成する。これに応じるように、マリウスの最期を描いた情景は、白い雪の連想から円環的に物語の冒頭の「白夜」を想起させる。死んだマリウスの唇には、自然の事象であるかのように、「空から降る雪片のように」“like a snow-flake from the sky”「神秘なパン」“mystic bread”が置かれるのだ（全集 3: 304）(*Works* 3: 224)。マリウスの人生は始めが終りに、終りが始めに呼応しており、白色のイメージを通して透明的性格の一貫性を強調していると捉えられる。

結論

マリウスは教養により自身の心の生得的な感受性と受容力を高め、その質をより良く保ちつづけた。そのように教養による自己修練を完成させることで､マリウスは自己の透明的性格の本質をより確実に把握したといえる。まさにマリウスはペイターにとっての理想的な性格のもつ美を具現化しているといえるだろう(Hughes 57)。以上、「透明的性格」における理想的人格が､『享楽主義者マリウス』の教養の獲得の過程によって示されていることを議論することで、本発表は同作品の新たな重要性を提示したと考える。

引用文献

Hughes, Daniel. “‘Marius’ and the Diaphane.” *NOVEL: A Forum on Fiction*, vol. 9, no. 1, 1975, pp. 55–65.
Pater, Walter. *The Works of Walter Pater*. Cambridge UP, 2011. 8 vols.
ウォルター・ペイター. 『ウォルター・ペイター全集』. 工藤好美, 玉井暲, 富士川義之他訳, 筑摩書房, 2002 年.